

機関番号：32517

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830026

研究課題名（和文） 追跡調査による小学校英語カリキュラムの効果研究
－日本と韓国の共通問題に注目して－

研究課題名（英文） The Effect of Primary School English Curriculum from a Follow-up Survey, Focusing Common Issues of Japan and Korea

研究代表者

金 ヒヨンスク (Hyun-Sook KIM)

聖徳大学・児童学部・講師

研究者番号：90524877

研究成果の概要（和文）：

本研究では、小学校英語カリキュラムのあり方への示唆を得るために、日韓の小学校英語カリキュラムの共通問題に注目し、その観点から小学校英語カリキュラムの特徴による効果を明らかにしようと試みた。文献研究を通して日韓の共通問題として「文化」を見出し、子どもたちに多様な文化について本物の経験をさせることが、外国語でコミュニケーションを行う際の基礎能力になることが明らかになった。追跡調査結果の分析を通してそれを確かめたい。

研究成果の概要（英文）：

For understanding the role of primary school English curriculum we attempted to explain the effectiveness of curriculum by its characteristics, from the viewpoint of common issues on the primary school English curriculum between Japan and Korea. We discovered from literature research "culture" is a common issue between Japan and Korea, and found the real experience about diverse cultures is a fundamental skill when talking in a foreign tongue. These findings will be ascertained through data analyses for the follow-up survey.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：小学校英語カリキュラム、卒業生調査、日韓の比較

1. 研究開始当初の背景

近年、日本と韓国両国では、国際化に対応するための外国語カリキュラムの改革が行われてきた。日本では2002年度から小学校の総合的な学習の時間において国際理解の一環として外国語会話が導入され、2008年3月に告示された小学校学習指導要領の改訂では、小学校5・6年で週1コマ「外

国語活動」が実施されることになった。今回の改訂で必修化にはなったが、これまでの小学校英語の基本的な考え方は大きくは変わっていない。一方、韓国では、1997年度から正式に教科として小学校3年から週2時間の英語教育が実施されてきた。「活動」や「遊び」中心の指導、低学年から音声中心の指導を中心に英語教育が行われてきた。さら

に、2006年度9月からは小学校1、2年生からの英語教育が実験的に行われ、2010年度からは3年生から週3時間に英語教育の時間を増やすことになった。

それでは、韓国と日本の小学校英語カリキュラムをめぐる政策の差は、カリキュラム効果にどのように反映されているのだろうか。先行研究を概観すると、両国の教師たちの意識面と生徒たちの英語能力への影響が考えられる。バトラー(2005)によると、小学校で英語を教える教師を対象に、どのような資質が重要なかを尋ねた調査の結果、両国の教師の認識に差がみられた(バトラー後藤裕子(2005)『日本の小学校英語を考える アジアの視点からの検証と提言』三省堂、189頁)。韓国の教師は、言語的スキルを指導できる能力と視聴覚教材を使いこなせるスキルを重視している反面、日本の教師は、文化的なものやパーソナリティを重要な資質として捉えている。両国のカリキュラムの違いが教師の認識にもはっきりと表れている。また、吉田(2004)は、韓国、日本、中国の高校生を対象として、2003～2004に年2回にわたって行われた生徒の英語能力の調査で、3か国の総合得点を構成する下位技能は各国の差(韓国はリーディングとリスニング、日本はライティング能力に優勢)があるものの、平均到達レベルはさほど大きい違いはないと分析している(吉田研作他「日・韓・中の英語教育の現状と今後の課題」『英語教育』大修館書店、53(8)、66～72頁)。すなわち、韓国と日本の小学校英語の効果は技能面ではそれほど変わらないということである。

しかし、日本の場合、これまで研究開発学校での多様な実践と教育特別区域での試みが、英語教育だけではなくカリキュラム研究、国際理解教育などの多角的な視点からの活発な議論を生み出していることを考えると、英語運用能力を測るだけでは教育効果は捉えきれないし、このような英語の成績のみで小学校英語教育の効果を評価するのは危険である。したがって、既存の英語運用能力だけに固執するのではなく、多角的な視点からの英語教育のあり方が求められるべきであろう。

日本での小学校英語カリキュラムに関する先行研究は立場論が多数で、データをもとにカリキュラム評価を行っているものは少ない。現在日本で必要なことは、英語教育の有無による効果ではなく、カリキュラムの問題として、学習内容の違い、活動の違い、指導体制の違いが生徒たちにどのような影響を及ぼしているかを詳細に検討することだろう。カリキュラム研究による厳密な追跡調査と、独自の実践の中で一般化への示唆を見出すことが必要である。

本研究では、特区での実践を中心に、カリキュラムの影響を捉えることで、小学校英語をめぐる諸課題、例えば、小・中連携、文字学習の導入、開始時期の早期化などのへの示唆を与えることができると考えられる。さらに、それを韓国との比較を通して相対化することで、その課題はさらに明確にみえてくるはずである。日韓両国は、小学校英語の早期化、教科化をめぐる山積する課題を抱えながら小学校英語カリキュラムの改善案を模索しているが、本研究では、両国に共通する問題に注目する。その理由は、両国がアジアでのEFL(English as a Foreign Language)の環境にありながら、言語構造的に英語を習うことが難しい国であること、文化的にも単一文化の色彩が強い国という共通の背景をもっているからである。両国の共通問題を把握した上で、多様な取り組みの中でその改善案を模索することは両国にとって有益だろう。

これまでの小学校英語に関する「効果」研究は、英語学習の有無による差異の分析に終わっている。しかし、カリキュラム研究の役割は、カリキュラムの特徴が生徒の学習経験にどう痕跡を残しているかについて、より深く細かく分析することである。これは、カリキュラム効果を生徒のカリキュラム経験から捉え、時系列的に分析する視角を提案している田中統治(「教育研究とカリキュラム研究—教育意図と学習経験の乖離を中心に—」山口満編著『現代カリキュラム研究—学校におけるカリキュラム開発の課題と方法』学文社、2001、21～33頁)による。田中は、カリキュラムのもつ多層性に注目し、「教育意図と学習経験の乖離」を前提に、カリキュラムのもたらす流動的な「効果」を質的に解明する方法の一つとして卒業生調査の有効性を強調している。卒業生調査によるカリキュラムの事例分析は、小学校英語についても有効であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、小学校英語カリキュラムのあり方への示唆を得るために、韓国と日本の小学校英語カリキュラムの共通問題に注目し、その観点から小学校英語カリキュラムの特徴による効果を明らかにすることを目的として行われた。その際、小学校の卒業生への追跡調査をもとに、小学校英語カリキュラムが彼らの情意的側面に及ぼす作用を分析した。

本研究のより具体的な研究課題として以下の3点を設定した。

- 1) 日本と韓国の小学校英語カリキュラム相違点を検討し、共通問題を抽出する。
- 2) 中学以降の英語学習と小学校英語カリキュラムとの間にどのような対応関係がみられるのか。

3) 両国のカリキュラムの特徴による影響は何か。

これらの課題を解明するため、異文化意識と外国語学習への態度などを尋ねた卒業生への質問紙調査の結果を分析する。

3. 研究の方法

本研究は2年計画により実施された。上記の目的を達成するために、次のような研究方法で研究を行った。

2009年度には、日韓の小学校英語カリキュラムに関する文献研究を行った。一方、韓国の教育課程評価院の小学校英語政策担当者とのインタビューを実施し、文献だけでは把握できない韓国の小学校英語をめぐる情報を収集した。

2010年度には、国内・海外調査ともに主に調査票配布（郵送法）による卒業生調査を行った。全国的に特色のあるカリキュラムが実践されてきた地域を八つ選び、その地域の中学校に調査を依頼した。一方、韓国ではソウルと京畿道にある二つの中学校に調査を依頼し、同様の質問紙調査を実施した。日本と韓国での調査実施時期は、日本が2010年10月から2010年12月の間、韓国は2010年11月である。

4. 研究成果

2009年度の研究成果は、両国の教育課程改革を検討し、「英語新教育課程韓日比較研究—小学校英語を中心に—」という題目で学会発表を行ったことである。その具体的な内容をみると、まず教科として英語が導入され11年が経った韓国は、授業時数を増やして、文字や文化に関する内容を充実させる改訂になっている。例えば、国際語として英語を強調し、多様な英語、文化に関しても英語圏のみではなく多様な文化を取り扱うことを強調し、非言語的な部分が強調されているのは、異文化間コミュニケーションの手段として英語を捉えているからであろう。

一方、日本の場合、総合的な学習の時間に国際理解の一環として外国語会話が行われ、2008年の改訂で「外国語活動」という教科ではない領域で導入しているのは、韓国の小学校英語に比べれば、ゆっくり改革が行われているように見られる。特に、韓国で強調している文化に関しては、日本の場合「体験的」という表現が強調されている。言語や文化に対する理解を知識のみで深めるのではなく、体験を通して理解を深めることを明記している。それは、子どもたちに本物の経験をさせることが、外国語でコミュニケーションを行う際の基礎能力になるからであろう。これまで研究開発学校などを中心に多様なカリキュラムを試みてきた結果を踏まえて

出された結果であると考えられる。

次の研究成果は、国際語としての英語と異文化学習の関連性について、実際の学校の英語カリキュラムの中でどのように実現させるかは、あまり議論されてこなかったため、「国際語としての英語と異文化学習の関連性に関する研究」という論文で、国際化に対応できる英語カリキュラム開発の視点を明らかにしたことである。それは、まず、教師が英語を脱国家化された言語であることを認識し、英語の多様化を認め、異文化間コミュニケーションを前提として英語教育を行うことである。次に、英語教育の中に必ず異文化学習を統合させること、その際には各学校の状況に合わせた異文化内容を工夫すべきである。

2010年度の研究成果は、主に調査票配布（郵送法）による卒業生調査を行い、日本は3,770人、韓国は1,400人、合わせて5,170人のデータを集めたことである。日本の場合、特区での実践を中心に、カリキュラムの影響を捉えることで、小学校英語をめぐる諸課題、例えば、小・中連携、文字学習の導入、開始時期の早期化などのへの示唆を与えることができると考えられる。さらに、それを韓国との比較を通して相対化することで、その課題はさらに明確にみえてくるはずである。

当初の研究計画としては、2010年度にデータの分析まで終了する予定であったが、調査対象者が当初予定した1,000人より大幅に増え、5,170人になったことと、調査の依頼、データ収集に予想以上の時間がかかったため、詳細な分析までには至らなかった。引き続きデータ分析を行い、日本カリキュラム学会での発表などを通して研究成果を公開していきたい（2011年7月16日カリキュラム学会で発表予定）。

本研究は、今までの英語教育で行われてきた評価法では、小学校英語カリキュラムの評価を仕切れないことに着目し、カリキュラム研究の視点からその効果を捉えようと試みる点で独創性・特色がある。これまで日本で行われてきた諸実践は、カリキュラム研究からみると政策を決めていく上で良いデータになるはずである。また、それは、韓国との国際比較をすることでその問題点が明確化され、小学校英語カリキュラムに関する今後の方向性を決めるのに十分役立つものである。本研究の結果は、長期的展望にたった小学校英語カリキュラムの効果の検証であり、特に、中学校以降の英語学習への影響と異文化意識との両側面での検討は、今後小学校英語カリキュラム構築に向けたデータとして

大きな意味をもつと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

金 瑁淑、「国際語としての英語と異文化学習の関連性に関する研究」、『教育学系論集』、筑波大学教育学系、第34巻、pp. 1-12、2010。
査読有

〔学会発表〕(計1件)

金 瑁淑「英語新教育課程の韓日比較研究」
2009年韓国日本教育学会秋季学術大会、韓国ソウル教育大大学校、2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 ヒョンスク

(Hyun-Sook KIM)

聖徳大学・児童学部・講師

研究者番号：90524877

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：